

【 9 】

氏名	浮田典良 うき た つね よし
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第71号
学位授与の日付	昭和46年5月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	北西ドイツ農村の歴史地理学的研究

(主査)
論文調査委員 教授 織田武雄 教授 谷友幸 教授 越智武臣

論文内容の要旨

本論文は、著者が Münster 大学における2ヶ年間に行った北西ドイツの Wostfalen の農村調査を基礎にして、この地方の村落形態・土地利用・農地区画・村落構造などの変遷を詳述した歴史地理学的研究であり、序章と5章より成る。

序章において、著者が本論文において意図したところを述べている。ドイツでは A. Meizen 以来、村落の歴史地理学的研究は極めて盛んであるが、しかしその大部分は、村落の起源が近世以前の村落の復元などを対象とした、村落の発生論的な研究に重点が置かれている。これに対して著者の研究は、これまでドイツでは余り触れられることのなかった、19世紀初頭から現在に至るまでの約1世紀半間における村落の変遷過程を、ヴェストファーレン地方について考察したものである。それはヴェストファーレンでは、1820年代にはじめて土地測量によって詳細な地籍図や土地台帳、名寄帳などが作成されたので、これを利用することによって、その後の変遷過程が的確に把握され、また地域の現状を理解するには、それが重要な意味を有しているからである。

また研究方法としては、著者はまずヴェストファーレンを3地帯に区分し、それぞれの地帯を代表する3ヶ村を事例村として、intensive な調査を行ない、さらにこれを類型化することによって3地帯を比較するとともに、3地帯の景観形態の変遷を明かにするために、丹念な作業に基づいて多数の地図の作成につとめている。

序章につぐ第1章は、ヴェストファーレンの農村に関する全般的な考察である。一般に村落は、集村と散村とに大別される。ヴェストファーレン低地の大部分を占める Münsterland は、ヨーロッパの代表的な散村分布地帯として知られているが、低地南部のレス層地帯では、集村が支配的で、典型的な塊村 (Haufendorf) 地帯をなし、ヴェストファーレン低地は北西ヨーロッパの散村地帯と集村地帯の双方にまたがり、村落の地理学的研究に好適なフィールドである。しかも散村地帯のうち、中央ミュンターランドでは、散村の最も純粋な形態である孤立荘宅 (Einzelhof) が卓越するのに対し、そのほかでは、排水の良

好な微高地に位置する Esch という古い耕地を中心に、数戸ないし10数戸の農家が集まって、Drubbel と呼ばれる村落を構成している。従ってヴェストファーレン低地の農村は、塊村地帯・ドルツベル村地帯・孤立荘宅地帯に大別し得る。

第2～4章では、以上の3地帯の事例対について行った実態調査の成果を記述している。すなわち第2章では、塊村地帯としてパーダーボーン台地の Benhausen 村を、第3章では、ドルツベル村地帯として東ミュンスターラントの Gimfte 村を、また第4章では、孤立荘宅地帯として中央ミュンスターラントの Nienberge 村を、それぞれ事例村としてとりあげ、村落形態・土地利用・農地区画・農業経営規模などについて、1830年前後と現状とを詳細に対比して考察している。

最後の第5章では、以上の事例研究を通じて明かにし得たヴェストファーレンの農村の歴史地理的性格を総括して、3地帯の特質を比較している。すなわち、1830年前後の状況についてみると、孤立荘宅地帯では、各農家の所有地は屋敷を中心に一円的にまとまっていたのに対し、塊村地帯では、農地は狭小な多数の地条に分かれ、各戸の所有地はいちじるしく分散していた。またドルツベル村地帯でも、エッシュにおいては所有地のいちじるしい分散がみられ、さらに周辺には共有地の広大なハイデがあり、放牧地や芝土採取地として利用されたが、共有地は塊村地帯には比較的少なく、孤立荘宅地帯ではほとんどみられなかった。しかし、その後の変遷をみると、ドルツベル村地帯では、共有地のハイデが分割、私有化され、また19世紀末には、塊村地帯では徹底的な耕地の整理統合が施行され、ドルツベル村地帯でも、エッシュの耕地にはそれが行われ、かつての所有地分散の状態は大幅に改善されたが、耕地の整理統合を必要としなかった孤立荘宅地帯では、その間、さしたる耕地の変化はみられなかった。従って19世紀初頭と比較すれば、塊村地帯やドルツベル村地帯では、景観形態にも大きな変化がみられ、ことにドルツベル村地帯を特色づけていたハイデの消失によって、今日ではドルツベル村地帯と孤立荘宅地帯とは、外観上では明瞭に区別し難い状態にある。

しかし他方、村落形態の如何にかかわらず、3地帯に共通にみられることは、村落を構成する農家の間に、20～50 ha、ないしそれ以上の広い農地を経営する専業の大農家もあれば、5 ha 未満の零細な兼業農家もあり、また都市化の影響を受けて都市通勤者となり、いまでは全く農業に従事しない非農家も少なくないことである。著者は事例村の調査において、個別的に農家の系譜を追跡して、現在の農村にみられる階層分化が、19世紀以後に形成されたものでなく、若干の例外をのぞいて、18世紀以前の村落の Vollbauer, Kötter Heuerling の諸階層に由来することを究明し、とくにドルツベル村地帯では、ハイデ共有地の分割によって、階層間の較差は、さらに拡大された形で固定されたものとみなしている。

また土地利用方式においても、19世紀以来の1世紀半間に、共通の変化がみられた。すなわち、かつての休閑をとまなう農法は消滅し、ハイデからエッシュへの芝土施肥も廃止され、ヴェストファーレンの農村では、ひとしく輪裁式農法にかわり、さらに最近では牧草地の比率が増大して、家畜飼育の意義が高まりつつあることを指摘している。

なお、参考論文5編は、わが国の近世村落と耕地との関係を歴史地理学の立場から論じたものであり、本論文と方法論的に関連するところが多い。

論文審査の結果の要旨

ドイツでは、すでに夥しい数にのぼる村落の歴史地理学的研究が蓄積されているが、それにもかかわらず、著者がヴェストファーレンの農村の歴史地理学的研究を試みたのは、著者も述べているように、ドイツの歴史地理学的研究が、村落の起源や開拓などの発生論的な研究に多く限られているのに対し、著者の研究が、19世紀以降の村落の変遷過程をたどることによって、現在の地域を理解する点に主眼が置かれていることによる。さらに、いま一つの著者の意図は、参考論文にみられるように、わが国の近世村落の研究において、著者がこれまで培ってきた問題意識や方法をもって、ドイツの農村を分析することに、大きな意義が存するとみなしたからであり、また著者の意図は本論文において十分に成功をおさめていると考えられる。ことに注目すべき点は、ドイツの農村の階層分化を、その歴史的背景との関連をもって考察し、現在のドイツの農村にみられる階層構成が、18世紀以前の農村の階層関係に由来することを、事例研究において、各農家の系譜関係を丹念に追求することによって明かにしている。また19世紀以降の農法の進歩や共有地の分割による農業の集約化、或いは近年の都市化の影響による農業人口の流出などの諸問題についても、多くの新しい見解を示しているが、このような歴史地理学の実証的分析は、従来のドイツには余りみられなかったものであり、ドイツの地理学者の研究に伍しても、著者の創意に富む研究成果は高く評価されるべきである。ただ、本論文においてドイツと日本の農村の比較にまで及んでいないのが惜しまれるが、これらは著者の今後の精進に期待したい。

なお、著者は調査の結果を系統的に45葉の地図に作成して、地図化 *Kartierung* の意義を強調しているが、地図化はドイツではとくに重視され、本論文でも重要な効果をはたしており、今後の日本の地理学研究においても、著者が行ったような主題地図の作成は、有力な手段となるであろう。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。